# サハリン瑞穂村の朝鮮人虐殺事件

崔吉城 CHOE Kilsung
東亜大学 *Toua University*

## はじめに

世界的に著名な言語学者ノアム・チョムスキーは『アジアとの戦争』(Noam Chomsky,1969：223-244）の「戦争犯罪」の冒頭に、ラッセルのことば「われらは裁くのではなく、証言するだけである。そして人間性を取り戻して正義に立たせる任務を果たす」を引用しながらベトナム戦争を人類にとって残虐行為であると批判する。暴力を振りまく野蛮な行為をやめさせ自由と社会正義を守る為にといった文章で終った。何故彼はそのような本を書いたのか。ある人は言うだろう。専門家でもない人が何を書くのかと。しかし、はたして戦争と平和は戦略家や軍隊に任せるべき問題であろうか。人類学では主に未開戦争は扱っても世界大戦のようなものは扱わない。ここで私は日本の「聖戦」の敗戦中にサハリンの小さいのどかな農村で起きた集団虐殺の「瑞穂虐殺事件」を取り上げようとしている。

私は朝鮮戦争のとき激戦場といわれるところで戦争を体験した。現場に居て戦争は如何に苦しいものであるか、特に交戦と交戦の間の空白状況においては戦争の怖さの極限を感じたことを覚えている。治安不在、混乱が極まるアノミー状況では人間は動物化していくようである。殺人、略奪、性暴行などが起きやすい。平和と安全のために美化された勇士の中から悪魔のようなものが現れる。この様なものは戦争には付きものなのであろうか。サハリンの朝鮮人虐殺事件はそんな状況を深く考えさせる。

1945年４月、ソ連は「日ソ不可侵・中立条約」の不延長を通告し、日本をあわてさせた。これは宣戦布告に準じるものである。８月９日、ソ連軍は国境を越えて南樺太へ侵攻し、戦闘は敗戦の８月15日を過ぎても続いた。この侵攻で日本軍は敗走し、南樺太全土は混乱に陥ちいった。ソ連軍は８月20日にホルムスク（真岡） に入ってきた(Stephan, 1971:153)。森下安雄は軍隊の経験から、砲声を聞いてだけで真岡にソ連軍が上陸したと判断した。真岡から約40kmに位置する瑞穂村ではデマが乱れ飛んだ。その噂を聞いて彼は朝鮮人が必ず日本人を裏切るであろうと思った。そんな状況の中で朝鮮

人集団虐殺事件が起きたのである。

瑞穂事件のあった所に記念石碑が立っている。私は早くからその問題に関心を持って記録していたノンフィクション作家の林えいだい氏を訪ねて行った。氏はそれに関する資料として「調書」「裁判記録」「瑞穂村でのドラマ」などを私に提供してくれ、心から感謝している。特にコンスタンチン・ガポニエンコK.Gaponienkoの著書『瑞穂のドラマ』の訳文はロシア語を読めない私にとって貴重なものである。ガポニエンコは1933年ウクライナに生まれた人で、1951年からサハリン居住、1958～1966　チェプラーノフスキー（双又村）で教員・教頭・校長として勤務、1955年ユズノサハリンスク教育大学でロシア語及び文学科卒、1969年にユズノサハリンスク教育大学歴史科を卒業した。ソフホーズ　チェプラーノフスキー党委員会書記長、1988年までピヤチレーチェ（逢坂村、瑞穂村に近い）にて勤務、ソ連ジャーナリスト同盟会員である。彼は公文書館所蔵の資料とインタビューなどに基づいてこの本をユズノサハリンスクで出版した。この本は主に調書と裁判記録によるものである。林氏は直接著者に会ってこの翻訳の原稿をもらったというがその後彼を探しても所在がわからなかったという。本稿は林氏の提供してくれた資料に基づいて帝国主義と民族の問題を考察する。ただ供述などは口述者によって食い違いが在り、整理するには困難なこともあり、不十分なところもあると思う。

## 1．瑞穂村事件

瑞穂村は真岡の東方40キロに位置し、鉄道豊眞線の中部に瑞穂駅があり、戦時中は極めてのどかで平和な僻村であった。今はソホーズがあって、チェプラノオ村と呼ばれている。この村はソ連との戦争勃発前までは日本人と朝鮮人が混ざって住んでおり、表面的には関係がよかったように見えたが、実は良い関係ではなかったようである。森下安雄は朝鮮人達から何かを買っても出来るだけ安く買った。朝鮮人が物を買う時は、最も高い値段をつけた。つまり朝鮮人に対しては安く買い、高く売るなど、朝鮮人を蔑視したようである。森下は朝鮮人達のことを軽蔑的にチョンコといった。この事件の主役を為した日本人全員は農民であり、夏川という朝鮮人は日本人に主人と言っているので小作人だったと思われる。土地を所有し難い朝鮮人としては小作人か、労働者になるしかなかった。最近のふた夏、日本人は朝鮮人の山本に貸家していた。勿論、無料ではない。山本はそこに妻と５人の子供たちの部屋を仕切り、家族を養っていた。松田という60歳くらいの老人もいた。妻

は子育て、洗濯、縫い物、夫への気づかい等家事を行い、食客達の食事は雇われた老婦人がまかなっていた。山本は事業家であり、道の修理や下水溝堀り、橋作り等の請負をしていた。土方の請負師は、他の事業主以上に同胞達を搾取していたが、彼は適度の賃銀を支払い、衣食を分かち合っていた。これが飯場になって約15人の朝鮮人が住んでいた。小屋（飯場）の住人達は、静かに住んでおり、毎日を平凡に暮らしており、村に現れることは稀であった。

日本人と朝鮮人はあまり親しいとはいえないが、会えば言葉を交わす、世間話しをし、ちょっとした家事の手伝いなどをお互いにすることもある。朝鮮人を虐殺した日本人は小学校を卒業し、農業を営んでいる農民であり、前科なしの初犯である。それなのになぜこのような普通の日本人が虐殺事件を起こしたのであろうか。

瑞穂村にはいくつかの朝鮮人家族が住んでいた。平山と夏川という朝鮮人の家族が住んだ。この２家族は隣同士である。朝鮮人の夏川は清住の隣り、朝鮮人の平山は栗山の隣り、つまり朝鮮人と日本人が隣近所の人であった。丸山は妻、娘（14歳くらい）、そして40～50歳の独身男性が同居しており、畑仕事をしていた。朝鮮人松本、山下の家もあった。平山と夏川の２家族だけが農業をしており、それ以外の朝鮮人は土木工事、道路、溝堀、灌漑の為の仕事をした。村の南側の大浦島には分譲された土地を開墾し、小屋を物置や、ガラス窓を取り付けて奥に朝鮮人達が住んだ。今部所有のバラックには50歳くらいの朝鮮人女性、11～12歳の少女、22～23歳くらいの若い女性と５人の子供、その中の１人は乳のみ児であり、７人の朝鮮人男性がいた。

## ２．朝鮮人虐殺

8月20日、ソ連軍の部隊が真岡港に上陸し、山峰を越えて、戦闘の音が聞こえてきた。北から避難者たちが現れてきた。彼らは日本軍が武器を捨て投降したり、50度以南へ退却しているのを目撃したと語っている。証言によると朝鮮人は赤軍の部隊が到着した際には、赤軍に味方し、日本を裏切ってソ連のスパイ活動をし、また避難してきた日本人達から朝鮮人達が実際に略奪していると聞き、我々が朝鮮人を抹殺せねば彼らが背くか、我々を抹殺だろうと確信し、朝鮮人を殺さねばならなかったという。つまり朝鮮人がソ連のスパイ活動、日本人を略奪するだろうということから虐殺に至ったという。それを整理すると次のように３段階に進行されたのである。

1）「朝鮮人は夜に飛行機に青や赤の懐中電灯で信号を送るソ連のスパイだ」、「ソ連軍を朝鮮人が先導している」、「朝鮮人は日本人を裏切り、武器を赤軍に渡している」、「ソ軍には朝鮮人が勤務しており、我々のことをすべて察知している」、「ソ連側に密告したりして、日本人を裏切って、復讐をしている」

2）「朝鮮人が日本人の婦女子を殺している」、「恵須取、泊居方面からの避難民達から聞いた話では朝鮮人達が赤軍の進攻と共に日本人の婦女、子供を殴り、略奪、殺人、復讐をしている」

3）「もしわれわれが朝鮮人たちを抹殺せねば、彼らがわれわれを抹殺するだろう」、「朝鮮人たちを殺さねばならない<朝鮮犬>を抹殺しろ」、「逢坂の山沢大佐が瑞穂に住んでいる朝鮮人たちを殺せと命令した」。在郷軍人会長の森下安雄は「赤軍が到着したらこれを援助し、苦境にある日本人住民に敵対し、逆に赤軍には忠誠をもって相対する」という理由で朝鮮人虐殺を決心した。

1945年8月20日から23日にかけて朝鮮人27人が惨殺された。ここには村人ではない3人も含まれているという。朴亨柱は次のように書いている。

この瑞穂村での被殺者27人の中には私の知っている人が3人いた。金水哲、金官三と吉田と呼ばれる中年の同胞である。金水哲氏（旧日本姓で中川）は私が真岡中学校に在学中下宿していた家の主人で、金官三氏（当時20歳）は金水哲の義弟（金水哲氏の妻芳子さんの実弟）であった。吉田さんは私とともに金水哲氏宅に身を寄せていた下宿人であった。この下宿屋を朝鮮人は当時「平壌家」と呼んでいた。1945年8月9日、ソ連が日本に対して宣戦布告し、日本敗戦の色がいよいよ濃厚になったとき、金水哲氏一家は瑞穂村の同胞知人の家を疎開先として家財を預けた。8月15日に敗戦となったので、19日に金水哲、金官三、吉田の三氏が家財を取りに瑞穂村までいって、その後消息を絶ったのであった。（朴亨柱：112）

＜8月20日＞

清住大助は森下安雄の家に見知らぬ朝鮮人を連れてきて、こう言った。この男は「この朝鮮人は村の者ではない」自分の家に泥棒に入り、泥棒しようとしたのだ。その男は「俺は泥棒ではない！俺はただ丸山といる朝鮮人がどこに住んでいるのかと聞こうとしただけだ」といった。清住は「これまで、一切錠前を使わず戸締りもしなかった。誰も決して盗むことをしなかった。

ところが今になって、泥棒が始まった」「今こいつら、見なさいよ。出しゃばり出し、頭を持ち上げ、盗みに歩き強奪を始めるだろう。彼らはロスケを待っているのだ。そういってみろ、待っているだろう、そうだろう？」そして約1キロほど離れたところへ連れて行った。清住大助が彼をベルトで殴り始め、サーベルで数回切りつけた。朝鮮人は清住の殴打を拒み、顔を手で覆った。それから細川は、足踵で腿のつけ根を蹴った。朝鮮人は、体を曲げ、重いうめき声を上げ身をのばした。その時、清住がバンドの留金で顔を打った。目から血がほとばしり出た。細川は朝鮮人を足蹴りし続けた。最後に森下がやってきて、短い敏速な動作で、朝鮮人の腹に日本刀を突き通した。死んだこの男から日本円（軍紙幣？）合計215円（250円？）をとった。約200メートル入った茂みにその死体を捨てて、森下の家に寄って数時後それぞれ帰宅した。

この朝鮮人集団虐殺を組織した１人である細川宏は裁判において次のように供述している。()内は他の証言である。

＜８月21日＞

８月21日朝７時頃、細川宏は千葉政志の家へ来た）角田と栗山と相談し、私たちは栗山の家にさらに数人、日本人男性だけ17人に集まってもらい、会議を開くことにした。この会議を開く訳と瑞穂村の朝鮮人住民を虐殺する決議を告げると、出席者はそれを承認した。この意図をもって、私と森下は日本人の家々をたずねた。私は日本人、千葉政志、永井幸太郎、鈴木正義等を会議に加えた。全員この方法で計９人が集められた。

我々の会議中に３人の朝鮮人が栗山宅にやってきた。そのうち１人は姓を夏川といったが、他の者の名を私は知らない。自分の腹に巻いていた鉄の鎖で朝鮮人夏川の頭を打ち殴って、数分後夏川は死んだ。森下は死体を捨てるように言った。３人で死体を草わらに捨てた。朝10時頃森下のところでお茶を飲んだ。(朝鮮人の夏川がやって来た。彼は挨拶をしながら「若しロスケが瑞穂村にやってくると非常に困る事になる」といった。私は「そうだ。困る」と云った。この時夏川に角田が近づき「おい、ロスケのスパイ！」剣で肩を斬った。夏川は畑へ走った。負傷したのを角田が追いかけ斬り下した。私の家からよく見えた。角田は皆の所へ戻ってきた。彼等はタバコを吸いながら夏川をうまく殺したと誇った。５分程して朝鮮人の丸山の家から村の中心に通ずる道を50歳くらいの朝鮮人農夫が歩いていた。彼が20米位の所へ来たとき千葉政志が発砲して殺した。栗山と大助が畑へ引きずり込み埋めた。縦にして松島の死体を葬った)。(栗栖昇は「ハイ、私は今部さんの納屋に住

む９人の男と１人の女を殺しました。何故殺したかといえば朝鮮人達はロシヤ語が出来、日本の倉庫や武器、食料品の所在を教えるなどスパイ行為をするだろうと思い、最後の日本軍への義務を果たすことに決めた」と証言した)。(鈴木秀夫の証言：朝鮮人は窓から飛び出し千葉政志が撃ったが打ち損ねた。鈴木秀夫と数人が追い始め、数米の所で鈴木が殺すように云ったが朝鮮人は飛んで逃げた)。

森下が朝鮮人山本（42～43）を刀で打って、２ヶ所胸に傷を負わせ背中を斬った。剣は約170年祖先伝来のものである。千葉が10米位の距離から朝鮮人松田を射殺した。老人は逃げ出したが彼を刀で斬った。この時４人の朝鮮人平山、夏川、松田と60歳くらいの老人が近づいてきた。千葉は荷車の後ろに隠れ約10米位の距離から朝鮮人の松田を撃った。彼は転倒し即死した。老人は逃げ出したが栗山と平山の家の間で大勢が取り押さえた。老人を永井幸太郎が殺した。

４人目が逃げたが彼を清住が初め鎖で殴り、細川が刀でとどめを刺した。４人の朝鮮人達を殺害した後全員約17人で、朝鮮人丸山の家へ行った。鈴木秀夫の証言によると朝の４時頃丸山の家へ森下、千葉最一、細川宏が近づき細川武と清住大助を外へ呼び出し、細川宏と千葉最一が幼児１人づつ殺し、女性と他の子供を自分が殺すことを決めたといった。それから森下、千葉そして鈴木が家へ入った。朝６時頃彼女は既に目を覚ましていた。彼女と子供らを外に呼び出し、大浦島へ通ずる道へ歩いた。鈴木が１１歳の女児を刀で刺した。千葉は12～13歳くらいの女児を殺した。森下は朝鮮人女性を短剣で刺し、それから４歳と６歳の子供を殺した。道から５米位のところで私は女の背を刀で３度斬りつけ斬殺した。

第３番目の朝鮮人は千葉政志が猟銃で射殺した。(４人は日本刀、若干の者はナタを持ち、３人は普通の剣先スコップ、若者達は、１米位の鎖、又竹槍を持った。栗山は軽く水割りのアルコール分を注いだ。つまみなしに飲んだ。このとき、屋敷の方に４人の朝鮮人が近づくのを認めた。３人は皆知っている者である。60歳くらいの老人は誰も知らなかった。来訪者達は丁寧に挨拶をし、朝鮮人夏川は主人に「瑞穂村にロスケが来ると我々は非常に困ります」と話したら栗山は「そうだ大変な事だ」と答えた。その時、誰だか「この野郎ロスケのスパイ奴！」といい、夏川の右肩を日本刀で打った。また馬車から千葉マサミが直撃弾で撃った。逃走者の中の１人が、打ち伏せられた。武装した日本人たちが追跡し、負傷した夏川を鎖や竹槍で殺害した)。(老人はすぐ若者達に捕まえられた。老人は足を払われ倒れ、打ち刺された。死直前の断末魔の声とともに、相手は１人の衣服の端をしっかり握った。彼の顔を足で蹴ったが、彼は手を離そうとはしない。そこで日本刀で手首を打

ち落とした。4人目の朝鮮人を清住が追いかけ、鎖で顔を打った。朝鮮人は痛みで叫び声を上げ、顔を押さえた。後ろから彼を竹槍で突き刺した。既に死人の首を細川がはねた)。あとの2人の死体をどこに埋めたか、私は知らない。

3人の朝鮮人を殺害した後、私達はみなそろって、栗山吉左衛門の家から松山という朝鮮人の家に行った。彼とその妻は朝鮮人の殺害沙汰を知っていたので、他の朝鮮人に知らせ、みなあちこち逃げかくれさせないよう、彼とその家族を殺すためである。(鈴木の証言：夏川正夫と2人の顔見知りでない朝鮮人3人がいた。角田東次郎が何の予告も無しに刀で朝鮮人夏川を斬りつけた。左手で傷を抑えながら留多加川の方の潅木林に走った彼を大勢が追いつき竹槍で止めを刺した。2人目の朝鮮人は私が銃殺し、3人目は永井幸太郎が斬った。それから平山と丸山の家へ殺しに出かけた。平山の家に52～53歳位の老人がいるのだが彼は家には居らず道で出会った。清住大助は彼をバンドと鉄の留め金で打ちはじめた。丸山の家に3人の朝鮮人がいた。彼らを縦列で歩かせた。日本人—朝鮮人—日本人の順に先に丸山が歩き、その次に清住が歩き、清住の家に通ずる道中の橋迄ゆかず森下、細川、清住等が3人の朝鮮人を斬殺した)。

丸山の家に行く途中で我々は朝鮮人の平山に出会った。(興奮した群衆は朝鮮人丸山の家へ押しかけて行った。丸山、彼の妻、14歳くらいの娘、そして2人の男性がいた。この2人は夏の間に丸山の家で畑仕事をしていた。森下は　「女達は直ちに疎開せねばならない！」と言い、妻が子供を連れて主人と別れ敷居をまたいだ。その後に　「我々と共に行こう、皆ロスケとの戦いに集まっている」。丸山は素直に歩き出し、彼の後ろから森下がついて行った。朝鮮人の後ろを、武装した日本人が歩いた。このような隊形で約1粁程歩いた。落葉樹林の側で、3人を殺した)。清住大助は丸山をベルトで殴り始めた、一方私は彼を数回サーベルで切りつけた。彼は倒れたが、まだ生きていた。とどめを刺したのは永井幸太郎である。丸山の家に行ったのは我々3人である。私と清住大助と1人の名は覚えてないが男が家にやってきた。家の中にはこの時丸山と女の子を連れた朝鮮人の女1人と3人か4人の朝鮮人がいた。その名前を私は知らない。清住大助は、女の子を連れた女は日本人の家族全員がしたように直ちに山に避難するよう、また朝鮮人の男達は男全員の集まっている栗山吉左衛門の家に来るようにと言った。

朝鮮人達は我々の助言を聞き入れ女子と一緒にいた女は必要な品物を持って山へ行った。一方我々は朝鮮人たちと一緒に丸山の家を出て、日本人の栗山吉左衛門の家に向かった。我々は家に連れて行く途中で朝鮮人達を殺すつもりであった。1人の朝鮮人に対し、日本人1人を配置しておいた。しばら

く歩いたところで我々は彼らを殺害しにかかった。私は自分の前を行く朝鮮人の１人を切り殺した。もう１人を森下安雄が殺した。残りの朝鮮人を殺したのは誰であるか私は知らない。朝鮮人の死体は道から程近いところの穴に放り込み草をかぶせた。

朝鮮人を皆殺しにした後、日本人の一団は栗山吉左衛門の家に向かったが、私は様子を伺うため村に行き、そこから自宅に向かった。（栗山は庭で手を洗い、水をまいている。軽い食事と一服した後、細川は集まった半数以上の者に清住の指導の下でモッコの作成、穴掘り、死体の運搬、埋葬せよと言った）。（栗山吉左衛門の屋敷で、夕刻から大饗宴が始まった。酒がでた。日本の大勝利や、歴史のいろいろな出来事を憶い出だした。帝国の敵となる者の懲罰、村の背信者達は正当に処罰された事を最後まで決着すべきである！夕食後、皆この場所に泊るように命じた）。

家に行く途中で日本人―栗栖昇と三輪光正に会った。彼らは話の中で私にオウラシメ（瑞穂村のはずれ）で、私達が朝鮮人全部を殺害したというのはほんとうか、とたずねた。私は、その通りだ、と答え、彼らに八号線（瑞穂村のはずれ）という所に朝鮮人がいないか、どうかたずねた。彼らはいると答えた。私は彼らにそこの朝鮮人も殺す必要がある、なぜなら赤軍がやってきたら朝鮮人たちは日本人を裏切るであろう、こういうことは南樺太の他の居住区でも起きていると話して聞かせた。

栗須と三輪は私にこう言った。自分たちも朝鮮住民が赤軍にあらゆる援助をし、日本人を裏切るということは聞いている。更に彼らは私に、我々が大浦島の朝鮮人を皆殺しにしたことは正しい、八号線地区の朝鮮人も同じようにやろうと言って、我々に彼らを手伝ってくれるよう頼んだ。我々は彼らを援助することを約束した。

三輪と栗須達と話をした後、私は栗山の家に行き、この２人が援助を願い出ていることを話した。そこにいた人全員が八号線に住む朝鮮人虐殺に手を貸すことに同意した。その後、私と森下安雄は栗須昇の所にこのことを知らせるために馬に乗って行った。栗須の所からついでに日本人の三輪光正、三船エツロウのところにも立ち寄った。彼らには八号線で近々朝鮮人を殺害することが前もって知らされていた。

＜8月22日＞

朝、日本人の集団は栗山吉左衛門の家に集まり、永井秋雄の家に向かった。永井の家には全部で５,６人が集まった。そして全員そろって、八号線にある、日本人今部のバラックをめざした。バラックには朝鮮人が住んでいた。途中で５人の日本人が我々に加わった。こういう具合にして、バラックには

全部で22人か23人が行った。

今部のバラックまで行かずに私達は山口という日本人の家にいて下見に出て、朝鮮人のいるバラックの付近をよく調べることにした。私と森下、それに後５人が出たが名前は覚えていない。付近を調べ終わってから、我々は２つのグループに別れ、分隊でバラックに到着、朝鮮人が逃亡できないようにすることに決めたというのは彼らはもうすでに目をさまし外に出ていたからである。グループの一つは道路の方から、もう一つのグループは店の方からバラックに近づいた。バラックのほんの近くまで来たとき、森下安雄は「前進」の号令をかけた。全員がバラックに突進した。中から１人の朝鮮人が私の方に走って出てきた。私はすかさずこの男をサーベルで切りつけた。その後２人目が手に棒を持って飛び出てきたので、私が飛びのくと、この男は逃げ出した。私はこの男に追いついてマラサーベルで切り殺した。この２人を処分した後で私はバラックに行った。その中には森下安雄がいて、彼と共に４,５人の日本人がいた。その名前は今覚えていない。女が２人いてそのうちの１人が足に怪我をして倒れていた。２人目の（もう１人の）女は５人の幼い子供と一緒に立っていた。１人の朝鮮人の男を森下がつかまえていて、めった打ちにしていた、その後で男を外へ出してサーベルで切り殺した。

その他の朝鮮人男子は殺害され、畑に横たわっていた。足に怪我をした女もバラックから外に出されて殺されたが、誰が殺したか私は知らない。２人目の女と５人の子供を森下安雄と清住大助が前に殺された丸山という朝鮮人の家に連れてきて見張りをつけた。見張りは清住大助と私の兄弟、細川武である。

今部のバラックの中には９人の男子、２人の女と５人の子供がいた。殺された朝鮮人の死体はバラックのそばに埋めた。女と子供は騒ぎを起こさないように、バラックの中で殺すことはしなかった。子供はひどく泣き叫ぶからまた子供がかわいそうだったが、殺さないというわけにもいかなかった。もし彼らを家族と一緒に日本の僻地に疎開させるにしても、朝鮮人のみに起こったことすべてを彼らが（子供達）しゃべる可能性があるから。という訳で、女と子供を丸山の家につれて来て、夜、眠っている時に殺すことにしたのである。森下安雄は以前日本人住民と一緒に山に避難していた、丸山の妻を子供と共につれてきて殺すよう鈴木正義、細川武と千葉最一に命じた。細川が番した女性は彼に「幼児は空腹なので飲ませたいが自分は乳が出ないといった。細川は「今牛乳のくれる所へ連れてゆく」といった。細川と森下は彼女を連れて行った。（彼女の髪を引っ張ったとき女体の匂いがし、欲望が出てきたのでこれを打ち消す為に強く斬った）。

＜8月23日＞

（床に寝ている幼児をキャベツを切る様に斬った）。寝ている子供達を殺した。朝鮮人女性は殺されながらも幼児を起こさない為に叫び声を立てなかった。女児は千葉最一が刺し殺した。死体は殺人現場に埋めた。殺人には鈴木住吉もかかわった。殺人後４人の子供と女の死体を２日目に家から約20米の所に埋めた。８月21日と22日血のついた刃物を留多加川へ投げ捨てた。大浦島での第２の殺人。大刀で殺し、そして直ぐ千葉最一へそれを返した。夜10時頃細川武と清住大助は朝鮮女性が子供と共にいる丸山の家へ出かけた。鈴木は２度か３度短剣で負傷した山本のとどめを刺した。森下安雄は「日本軍司令部から朝鮮人達を全部殺すよう命令を受けた」と言った。細川と栗山が発言し、栗山の歓待で酒を飲んだ。

大浦島で、７人の朝鮮人男子と１人の50歳位の老婦と11～12歳位の女児の９人を殺した。死体運びのモッコを作る。晩飯は魚とご飯。隣同士仲良く暮らしたようだが何故殺害への同意をしたのだろうか。栗山は対面審査で「自己の隣人を殺すということを知っていた！」という。21日夜遅く吉左衛門の家で夜食を食べる。女達は既に疎開していたので日本人男子でまかなう。森氏と細川は夜食後誰もどこへも出ないように言って彼等は日本人達を集めに出て行った。女は前を12，13歳くらいの女児の手を引いて歩き、その後から千葉政志が母と共についてゆく女児を刀で肩胛骨の中間を12～13ｃｍ斬りこみ又２度打ち下す。そして女児は死んだ。小川の近くで私は女児の母親が両手を拠り上げられているのを見た。

森下の命令で飯場に近づき飛び込んだ。会議を開き、出席者全員が武装して飯場へ押し入り、今部の大納屋に住んでいる15～16人を皆殺した。細川は刃物で腹を刺し、また２人目を刺した。殺したのは未知の３人の朝鮮人である。女と５人の子供の死体は家の近くの穴に埋め殺害後2,3日経てから土をかぶせた。

栗栖昇は早朝４時近くに起きて永井秋雄の家へ向かった。30～40cm刃渡りの短剣を持って朝の５時頃納屋に到着した。森下が指揮を取った。納屋をとり囲んだ。窓から朝鮮人達が見ていた。森下は納屋へ突入した。朝鮮人達は窓から走り出した。私自身は千葉の銃で負傷した25～26歳の朝鮮人を殺した。私は彼ののどと胸を何回か突き刺しとどめを刺した。瑞穂村で働いていたという朝鮮人達は彼らがしばしば入れ変ったので誰だか私は知らない。殺人現場には２人の女性と３人の子供が居りました。森下が女と子供を連れ去ったが私は彼が彼らに何をしたかは知らない。細川は八号線にいる朝鮮人達を殺すように頼んだが大浦島では既に殺されていた。

以上の細川宏の供述は裁判所の尋問の際、清住大助陳述によって完全に裏

付けられた。大助の供述によると彼らが殺害したのは全部で27人、その中には女性３人、子供が６人いる。５人の子供をつれた女を殺害した事実に関しては千葉最一が次のような供述をしている。

８月23日夜、森下安雄と細川宏の命令で私と細川宏の兄弟である細川武が丸山の家にいた朝鮮人女性とその幼い子供を殺害した。我々が家に着いたときは女と子供は眠っていた。私は自分の日本刀で女とその乳飲み児を切りつけた。残りの子供は私と細川武　が一緒にサーベルで切り殺した。死体はそのままにしておいて、我々は森下安雄の家に行った、というのは、この日は山に避難することを決定したとき、森下はこのことには反対せず、我々につまり、私つまり千葉最一、細川武　と鈴木正義に次のように命令を下した。避難場所で以前、彼らが避難させた女の子を連れた朝鮮人の女を見つけ出し、その山で殺害せよ、というものである。殺害は我々によって実行された。ちょうどその日に我々３人つまり私千葉最一、細川武と鈴木正義は瑞穂村の付近の畑で、女と12歳の少女を見つけ出し、この２人を殺した。細川武がサーベルで女を切り殺し、12歳の少女は私と鈴木正義が殺した。鈴木はこの子に手斧で切りつけ、私が刀でとどめを刺した。

＜８月24日以後＞

瑞穂に戻った8月25日の晩、栗須の所へ道中直夫がきて言うには「未だ皆戻らないうちに埋葬してしまう」と。今部の家へ行った。其処には朝鮮人の女性が未だ生きていて唸っていた。道中は１人の朝鮮人を棒打ちで殺し、女性の方はカサワバラがスコップの背で頭を打ちとどめをさした。それから死体を埋め始めた。女を引きずり私は生き埋めにしようといったがカサワバラがスコップで２度頭を打って、止めを刺した。女が穴に投げ入れられた後打った。暗くて彼女が生きているか死んでいたかははっきりしなかった。生きていたかも知れない。

栗栖がカサワバラの所へ走ってきて「朝鮮人達が略奪をしている、彼らを殺さなければならない！といった。八号線の方は殺さねばならぬ、所で我々だけでは力が足りない。森下と話して力のある者達を選ぼう。森下が請負師の山本にバラックから出てくるよう命じたが、彼がそれを拒んだので２人の日本人が彼を連れ出した所を森下が剣で斬りつけた。森下は納屋の中で私に叫んだ「逃げた、逃げた！彼を追いかけろ！」私は彼に納屋から40米位の所で追いつき２度殴って殺した。窓から飛び出ようとした朝鮮人を私は背中を殴ったが致命傷ではなかった。疎開から帰って８月26日に死体を埋葬した。朝鮮人の３つの死体、その１人の胸の上衣は血にまみれていた。朝鮮女

性の右足に大きな斬傷跡と胸が血まみれの死体を見た。女の死体を25～30米の所へ運び出した。男の死体もやはり埋めはしなかった。

その他この事件に関わる被告達も裁判で、被告、細川宏の供述を完全に裏付ける供述をしている。清住大助と千葉最一も27人の朝鮮人（その中に３人の女性と６ヶ月から12歳の子供6人を含む）を虐殺した罪を認めた。

## ３．検死、調書、判決、執行

1946年７月に行った死体発掘と検死によって次のようなことが明らかになった。全部の死体（死者全員）に無数の（細かく刻まれた）刺し傷があり、いくつかの死体はバラバラにされていた。つまり、頭部や手足が切り離され、死者の頭蓋骨には穴があいていた。大多数の死体の肋骨や手足はあちこち折れていて、この殺人が残忍な性格を帯びていることの証明となっている。とりわけ丸山の妻とその12歳の娘の死体を調べると、頭蓋骨の額の部分と頭頂部が陥没していることが分かった。また、母親の方は、肩甲骨の所に3箇所、後から刺された傷があるのが見られた。左の肋骨には多数の骨折が見られ、腹部には２箇所、貫通した刺傷があった。背負いひもで母親におんぶされていた5,6ヶ月の赤ん坊の死体を検死した時には胸部と腎部を貫く刺傷が見つかった。

損壊状況は次のとおりである。

＜1946年7月19,21,23日調書＞

極東管区主医鑑定書（主法医鑑定役グドコーフ・エ・エムの立会委員会と瑞穂村の住民が立会）によれば次のように検死された。

穴No.１　深さは30cm、村の中心から2km，日本家屋より約250m，留多加川左岸17 mの位置、穴の回りは若い落葉樹の茂りと沼の葦とバラの潅木がある。鑑定：鋭い刃物による頭切断、胴の第５腰背骨付近が斬切…肋骨の左右に多数の骨折を認める。

穴No.２　右肩甲骨の骨折１ヶ所、多数の肋骨5,6,7,8番目の骨折、左頭丁骨骨折、重い鈍器による破傷

穴No.３　日本家屋から30米、上部に横たわった死体には頭部が死体から切断、頭蓋骨後頭部に穴有す。肋骨の左右に多数の骨折箇所

第２の死体、頭部に２箇所の骨折、胸骨に貫通穴傷槍突き、肋骨の左に多数の骨折

第３の死体、右手首切断、左下に多数の骨折

第４の死体、鼻及び下あご部分切断、後頭骨に斬傷、上肢骨と肋骨の左右に

多数の骨折
穴No. 4　瑞穂村からの約15kmの地点，死体が重なって横たわる。上に女児の死体。女の死体は年齢12～14歳と認める。額と項頭に鈍器による穴。下方の女の死体には肩甲骨部分の刺し傷３箇所、背中側からあり。
穴No. 5　瑞穂村西方１kmの位置、男性30～40歳の死体は頭蓋骨部分に鋭刃による器具による多数の傷を認める。胸部に多数の傷と右肋骨全部骨折
穴No. 6　男性：頭蓋骨に２箇所傷跡が頭蓋内に及ぶ。右上眉鋏斬傷、頭蓋骨に多数の骨折

第４の穴の位置、瑞穂村から約15ｋｍから検死し、作成された法医鑑定書の中から４人の幼児の死体は次のような状況である。死体は重なり合って横たわる。その上部のものは12～14歳前後の女の死体である。眉間と頭項部分に鈍器での骨折傷2ヶ所刺傷、頭蓋骨の側頭骨に穴があいている。下部にある女性の死体は６～７歳の女児、頭蓋骨陥没、胸と腹に無数の刺傷、背骨部分の後部からの斬突き傷跡がある。女と子供の埋葬されたところの男子は４，５歳位、胸骨の破壊、多数の骨の付け根の骨折、頭蓋骨に２箇所の穴、骨折跡、胸と腹部の多数の斬突き傷跡がある。３～４歳の女児は頭項部の破壊、首の右、腕付け根部分に斬傷跡がある。穴底にある成人女性の死体は青綿のオシメをした児を背中におんぶしている。死体の頭蓋左眉骨に斬傷、首に２箇所の斬傷、左側よりの多数の骨折、腹部に貫刺傷がある。

1946年９月28日デヴェーヴェーオー（極東軍管区）軍法会議の判決により、細川宏、清住大助、栗栖昇、千葉政志、永井幸太郎、細川武　、千葉最一はロシア共和国刑法第16条、58項の４、第58条の88項及び58条の11項を、また千葉マシには第58条14項がそのれぞれ適用され、有罪とされる。全員が個人的財産没収の上、銃殺刑の判決を受けた。

栗山吉左衛門、道中忠雄、橋本住吉、三船悦郎、三輪光正、鈴木正義、カシワバラジュンシ、永井秋夫、鈴木秀夫、栗山正二はロシア共和国刑法第16条、58項の４、第58条の8項及び58条の11項に基づき禁錮刑に処せられた。

1947年、２月26日、細川宏他銃殺刑を受けたものの刑が執行された。カシワバラジュンシは1949年1月4日に死亡、角田東次郎らは1948年８月28日に死亡した。鈴木秀夫はソ連邦最高裁判所国防委員会の決定により1953年6月15日刑期を終える前に釈放された。その他、有罪の判決を受けた8人の消息は明らかではない。

ＫＧＢシベリア公文書保管所の「軍事裁判判決書」による。

死刑（銃殺刑）７人：栗栖昇（1921）永井幸太郎（1917）清住大輔（1909）細川宏（1919）細川武（1928）千葉政志（1903）千葉最一（1928）

禁錮刑（10年）11人：三船悦郎、角田長次郎、橋本登吉、栗山吉左衛門、

鈴木秀夫、道中忠雄、栗山正二,三輪光正、柏原王子、鈴木正義、長屋昭雄
ソ連最高裁判軍法協議会緊急最秘密1946年12月10日、主法鑑査官・極東管区主医監査省　グドコーフ。1947年2月26日ウラジボストク市にて執行にウリィリフが署名

## 4．武装化した日本農民

この事件は1945年８月20日から23日までに、のどかな農村であるサハリン（樺太）真岡郡瑞穂村で日本人が同じ村の住民である朝鮮人をゼノサイドした事件である。瑞穂村で３人の女性と６人の子供が混ざって、総２７人が殺害された。それについてソ連当局は犯人を逮捕し、供述や検死など資料にして有罪判決をし、1947年２月26日に処刑して終結した。しかし全体を指揮して殺人をした代表者である森下安雄は欠落している。自決したか逃げたかは不明である。また当時疎開した遺族が残っているはずだが現れていないという。ソ連が終結した事件とはいえ、日本は真相糾明などもしていない。

農民である瑞穂村には在郷軍人会と青年会が日本人のみで組織化され、ほぼ武装化されていた。在郷軍人会には会長森下安雄をはじめ、元陸軍上等兵細川宏、元陸軍曹長栗山吉左衛門と会員清住大助、永井幸太郎がおり、全員武器を持っている。会長の森下安雄は1940年から1944年まで日本軍隊に勤務、曹長、除隊後家業につく。応召前、青年団を指導し、短い日本刃（鉈）を持っていた。細川宏は軍隊に上等兵として勤務し、在郷軍人会では森下の補佐である。短い刃物のナタ（鉈）を持っていた。千葉正義は1927年から1935年まで日本民政党メンバー、上等兵、銃アリサカ76301番号、ベルダン銃―古い物、日本刀１丁―古いもの、アリサカ銃の弾、銅弾24弾蒼、黒弾―１１弾、ズック弾薬盒、弾入れカバン、猟銃、短剣フィンク刃渡り35～40cmを持っていた。永井幸太郎は支那事変に参加しメダル、赤十字章、勲８，５等章を受賞し、軍用長剣を所有した。栗山吉左衛門は1923から1927年まで軍隊勤務、上等兵であり、栗毛色の馬、生後３ヶ月子馬を持っている。長男は23歳で日本軍隊に勤務した曹長で村役場の顧問、最上位の位で、長剣を持っている。このメンバーはほぼ武器を持っている。在郷軍人以外に鈴木秀夫は古いサムライの刀を持っていた。栗栖昇は剣、1.5米位の竹槍、スコップ３丁、長さ90～100cm、８～10mm中の銃鎖を持っている。角田は軍用短剣を持っている。

また同村の青年団には細川武、同団員永井秋雄、千葉政志、鈴木住吉など30数人の団員がほぼ武器を持っている。青年団は在郷軍人会の息子たちが

中心になっている。森下と細川が任務を団員に付与した。青年団は軍隊勤務のための養成をするところである。月に3，4日昼から夕刻にかけて訓練を行った。その内容は軍事教練、体育、数学及び古代日本歴史である。彼らも武器を持っている人が多い。毎年逢坂、双又、清水の各学校から9月8日に集合し、これに軍の将校も参加した。永井秋雄は6歳の馬（牝馬）、生後4ヶ月子馬を持っている。橋本隅吉は短剣を持っている。永井秋雄（銃）、カシワバラジュンシ（銃）、道中忠雄（刀）、栗栖昇（短剣）、鈴木秀夫（軍刀）、鈴木サジロウ、橋本住吉（ナタ40cm）、三輪（名前不明、銃）、三船一郎（ナタ30～40cm）などは武器を持っていた。

このようなことはこの村にだけの例外的なものではなかった。日本植民地に移住した日本人の中には武器を所有していた者もいた。特にサハリンのように土着の先住民達は狩猟の為にも銃などを所有していたので日本人としても武器を持つ必要があったのかも知れない。旧満州特に北満州に武装開拓移民を送ったのは周知の通りである。在郷軍人会と開拓団は、先づ銃を以て戦うことであったという。満蒙開拓青少年義勇軍も設けた。筆者などが調査した韓国・巨文島に移住した木村忠太郎もピストルを所持したという証言があり、終戦直後在郷軍人が治安を担当して武装を解除したのが分会史に書かれている。

| 氏　名 | 生年 | 出生　居住地 | 学歴 | 政治活動 | 所有武器 |
|---|---|---|---|---|---|
| 森下安雄 | 1919<br>? | | | | 長剣 |
| 細川　宏 | 1919 | 北海道常呂郡佐呂間<br>瑞穂村 | 小卒 | 非党員<br>青年団教員 | 鉈 |
| 清住大助 | 1909 | 九州大分県宇佐市<br>瑞穂村に居住 | 小卒 | 非党員 | |
| 角田東次郎 | 1909 | 北海道札幌市<br>瑞穂村 | 小卒 | 非党員 | 竹槍、銃鎖、スコップ |
| 千葉政志 | 1903 | 宮城県登米郡北方<br>瑞穂村 | 小卒 | 日本民政党党員経歴 | 銃、ベルダン銃、アリサカ銃、猟銃、短剣、弾 |
| 永井幸太郎 | 1917 | 宮城県戸田郡涌谷<br>瑞穂村 | 小卒 | 非党員 | 剣 |
| 永井秋雄 | 1927 | 瑞穂村生まれ | 高卒 | | 馬、銃 |
| 栗山吉左衛門 | 1903 | 宮城県戸田郡<br>瑞穂村 | 小卒 | 非党員 | 馬 |
| 鈴木秀夫 | 1906 | | | | 軍刀 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 橋本住吉 | 1928 | ホルムスク地方<br>瑞穂村 | 高等<br>小卒 | 非党員<br>青年団団員 | 鉈40cm |
| 栗栖昇 | 1921 | | 高等<br>小卒 | | 短剣 |
| 三輪 | | | | | 銃 |
| 三船 | | | | | 鉈40cm |

朝鮮人虐殺には組織的に木銃、竹槍、刀、ナタ、日本刀、猟銃、銃などの武器を使って行った。平均年齢27歳、農民たちであり、組織的に行った。石田巡査、森下安雄伍長、細川軍曹、千葉正義上等兵、永井高太郎上等兵、清住大助一等兵などが集会を開き、瑞穂村に民兵隊を組織した。警察を含んだ組織になっている。森下安雄が指揮し、第一補佐は石田巡査、第二補佐は細川であり、17人が民兵であった。約１年後ソ連当局が知って公式に調査（国家保安省ＫＧＢ）して細川宏他計18人に有罪判決、処罰した。

| 月日時 | 殺　人　者 | 被殺人(朝鮮人) | 武　器 | 場　所 | 死体処理 |
|---|---|---|---|---|---|
| 8月20日<br>8月21日 | 細川宏 | 清住家に入った泥棒(?) | | 森下安雄の家 | 215円を奪い、死体を捨てる |
| | 鈴木、千葉政志 | 夏川正夫 | 鎖、竹槍、銃 | 留多加川 | 埋めた |
| | 清住大助 | 老人 | 日本刀 | | 埋めた |
| | 清住大助、細川宏 | 不明 | 鎖、日本刀 | | 埋めた |
| | 森下、細川、<br>清住 | 丸山 | 鎖、棍棒、<br>日本刀 | | 埋めた |
| | 上同 | 男性 | 鎖、日本刀 | | 埋めた |
| | 上同 | 男性 | 鎖、日本刀 | | 埋めた |
| | 千葉政志 | 平山 | 猟銃、日本刀 | | |
| 8月22日 | 角田東太郎 | | 刀 | 栗山の家 | |
| | 森下 | 山本 | 刀、剣 | | |
| | 千葉政志 | 松田 | 銃 | 栗山の家 | |
| | 永井幸太郎 | 面識のない人 | | 栗山の家 | |
| | 清住大助<br>永井幸太郎 | 平山 | ベルト<br>サーベル | 丸山の家に<br>行く途中 | 道の脇に<br>埋めた |
| | 森下安雄 | 女性(母) | 短剣 | | 穴に放り込んだ |
| | 千葉最一 | 13歳女児 | 刀 | | |
| | 鈴木 | 11歳女児 | 刀 | | |
| 8月23日 | 森下、細川、道中、<br>清住 | 男女、子供など<br>15～16人 | 刀、短剣 | 大浦島の<br>飯場 | 林に埋めた |

## 5．スパイとされる朝鮮人

日本とソ連の挟間にいた状況において朝鮮人は時にはソ連側から時には日本側からスパイとされた。それは日本とソ連の挟間にいる状況で両方からスパイとされた。サハリンの日本軍はソ連のスパイに対処するためにサハリン少数民族を諜報活動に利用した。彼らはサハリンの南北を跋渉しながら猟をして生活したので利用性が高いからであって、ソ連軍も彼らをスパイとして利用した（田中了編、1994：52－65）。しかしこの村の朝鮮人はそのような意味でスパイではない。それよりは朝鮮人が勝者の味方、勝者になりそうであり、そして復讐されるという恐怖心があったと思われる。それよりもっと大きい理由は朝鮮人に対する差別と憎しみによる虐殺といえる。その意味で普段は隠れている偏見と憎悪が爆発したという点で関東大地震の時の朝鮮人虐殺に比肩できると思う。しかしここで問題になった日ソ両側からスパイ視されたということは朝鮮人のマージナル、二重文化の特徴の裏返しとも言えるだろう。

1） ソ連側から

ソ連は日本人に最も近い危険な民族として朝鮮人を見た。極東シベリアや沿海州に住んでいる朝鮮人は日本のスパイであろうとの嫌疑がかけられたといわれている。朝鮮人はソ連地区に生きながら日本にスパイ行為をしたという嫌疑で逮捕された。ソ連にとっては日本と近い民族として疑わしくて，日本人と分離させようという政策を取った。1930年代に入ると、日本の大陸侵略政策によって極東の事態がしだいに先鋭化したため、ソ連は不安にかられた。ソ連には日露戦争の敗北、日本軍の極東遠征侵略という苦い経験があった。さらには1931年の満州事変、32年の満州国の登場という情勢の流れの中で、いっそう日本軍に対する警戒を強めた。当時、ソ連の国境地帯では朝鮮人の独立運動が熾烈だった一方、シベリアではソ連に対する日本の諜報活動が活発だった。日本の諜報活動には高麗人が多数利用された。高麗人は朝鮮語、ロシア語、日本語、中国語に堪能だったし、ソ連にとっては朝鮮人と日本人の区別がつきにくかったからである。ソ連当局は高麗人を信じようとはしなかった（鄭東柱著，1998：98）。日中戦争勃発以後ソ連は日本を警戒するようになり関係が緊張していた。その時朝鮮人が日本の間諜をしているという噂が回った。スターリンは朝鮮人が日本人と極めて類似しており国境地方に住んでいるので戦争期には障害になり、間諜になりうる存在であるので移住を決定した。また1沿海州に居住している朝鮮人達が独立運動をす

ることが日本の侵入の名分を与えるか、あるいは朝鮮人が日本の間諜活動をする憂いがあると考えてと1937年沿海州と北サハリンの朝鮮人たちを中央アジアに強制移住させた（キンピオトルゲルノビチ、バンサンヒョン訳『在蘇韓人移民史』探求堂、1993：12）ソ連側からは朝鮮人は日本人と最も近い危険な民族に感じられた。ソ連地区に生きながら日本にスパイ行為をしたという嫌疑で逮捕される等ソ連としては日本と近い民族として疑わしく思い、南サハリンでは朝鮮人はソ連のスパイであるといわれたりした（林えいだい、1992：197）。この事件が物語るように日本人からはソ連側のスパイと思われたのである。

それは沿海州やサハリンにいる朝鮮人たちが日本人、あるいはその類のものとして認識した。日本に近いということゆえに疑われた。1937年中央アジアへ強制移住もいくつかの理由があるといわれているがソ連が朝鮮人を日本人と分離したのが主であろう。北サハリンでは朝鮮人が日本のスパイとして疑わしい存在になったことはそのような脈絡から理解できる。ソ連地区に生きながら日本にスパイ行為をしたという嫌疑で逮捕される等ソ連としては日本と近い民族として疑わしくて，日本人と分離させようという政策が生じた。北サハリンでは朝鮮人が日本のスパイということと対照的に南サハリンでは朝鮮人はソ連のスパイといわれたりした。

2） 日本側から

19世紀以後朝鮮人の沿海州への移民者は大部分農業移民であったが中には独立運動をする人が混ざっていたので日本は武装勢力以外の農民さえ間諜と考え、1920年4月4日に新韓村の朝鮮人数百人を虐殺した事件が発生した。1922年日本軍が撤収しながらソ連に朝鮮人の独立運動を中止させることを要求した（崔協・李光奎1998：176から再引用）。サハリンの高等警察は主に独立運動者を「要視察」とした。朝鮮人取締に関する文書綴には要注意朝鮮人の手配や、所在不明者の手配の通達などが記載されている。それによると「鮮人」「思想」「共産」「民族」などに分類して、「要注」「特要」「思想」「容疑」のランク付けをしている。特に樺太はソ連国境と隣接しており、ソ連の領土である北樺太から移住して来た朝鮮人にはスパイ活動を防ぐために防諜取締をし、防諜要注意者の手配した。管轄別の朝鮮人の人口(朝鮮人現在表)を調査して、「要視察」「要注意」と、所在を把握し行動を視察する。朝鮮人を犯罪人視し、思想つまり独立運動者としての憂いがあると、報告し、手配する。本籍、前居住地に照会して周密正確に調査し、北樺太の出生者については前居住地における交友関係を調査するという。これはソ連の領土に生まれたことに注意を払っていることであろう。1930年、樺太長浜の鮮人

鄭用基の飯場にて労働しながらそのニュースを漏らしたり、知取など転居したり所在不明になっているので厳重捜査して報告すべしという。飯場とは石炭山において飯場頭が鉱夫の供給保護監督する制度であり（九州産業史料研究会、『鉱夫待遇事例』1956：212）、朝鮮人が飯場頭になって労働することも多かった。その組織に独立運動者が入り込むことを恐れている。

カナダ人ルーサーリスガー・ヤング（61歳）は朝鮮と日本で宣教活動をし、独立運動として47教会を広く団結させ、行方不明者請求などをするので樺太支教会は知取教会、恵須取教会を要注意としている。新聞が島内に郵送されるので類似の印刷物、新聞が島内に郵送されないように通牒し、樺太恵須取町武士部落任存和、樺太知取町支部準備会、樺太知取町松ヶ枝町親睦会などを要注意としている。1942年２月21日朝鮮人学生の視察強化に関する件で、治安維持法違反被疑者として朝鮮独立や党再建を企図し、不逞運動する内地在学生96人の学校別の数の図が通知された。６月23日朝鮮人共産党と日本共産党と連携に対して北海道で陸軍特別演習等の行事の前朝鮮人名簿作成することを指示した。

朝鮮人に関する注意は特に団体に至って極めたようであった。吉田三郎（林和仲）外12名は1941年４月８日結議兄弟相互会なる鮮人団体を結成した。結成の目的動機等に関して調査する。炭鉱における友子会乃至各県人会、類似の親睦団体にして本会会費徴収を行わず慶弔に際しての金品贈与は各人任意による等何等他意がないようであるが、このような朝鮮人の自主的団体の結成は裏面になにか趣意があり、不軌敢行の温床なる憂いがあるので、このような自主団体をできれば解体させること動向観察すべきだという。

1942年３月23日に、朝鮮人の民族主義運動は極めて執拗にして随時その客観情勢に応じ或は搭頭し或は蟄伏潜在するなど、巧みに客観情勢を利用し又は他の運動に便乗して策動を持続しつつある実情にして表面好転化せりと謂うも尚即ち嘗て満州事変の勃発に依り当時彼等は我が国力強大なるを直視し、帝国新奇の念乃至威服の念を抱くに至りその対日感情は著しく好転せることが認められた。「更に品事変の勃発に再び帝国の強大なる国力を感得し一般朝鮮人は思想上重大なる影響を受け、之により皇民たる自覚を一層強めたるものの如く一応其の動向は好転を示し」しかし学生層、宗教家においては依然として民族的偏見を固執し毫も覚醒せず、支那事変を観望して秘かに帝国の敗戦と朝鮮の独立を希ひている。

造言飛語をする朝鮮人を検挙送局した。1942年５月20日、東京市城東区亀戸町の人夫韓必信（清水必信、20歳）は現下我国空前の重大時局に際し真に挙国一体東亜戦完遂に勇住邁進の秋之を認識せざるのみならず偏狭なる民族的反感意識を抱懐し銃後攪乱を企図し種種造言飛語をしたので警視庁が

検挙し、5月8日陸軍刑法第99条違反として東京刑事地方裁判所検事局に送致したる趣通報があった。コミテルンの民族運動に対する指令の件、朝鮮民衆の扇動民族意識濃厚なるものの結果、朝鮮共産党及党員を支援することが予想されるので相当注意視察すべきだ。本籍江原道生まれ、農業尹南薫（18歳）は1927年9月4日両親と共に内地住所北海道転入し温根別小学校6年を卒業し家事農業を手伝い、1939年11月15日本籍地の金点述（19才）と結婚して住所地で農業に従事した。渡航後内地語に精通し、民族意識が熱く、一時帰鮮などの取締りに不平不満をいう。1940年10月18日家出所在不明、身長5尺5寸位、丸顔、頭髪五分刈、色白、黒色の折襟洋服上衣に国防色乗馬ズボン黒色編上革靴、戦闘帽、日本語巧みである（1941年5月15日）。

1942年3月23日、朝鮮人の民族主義運動は極めて執拗にして随時その客観情勢に応じ或は搭頭し或は蟄伏潜在するなど巧みに客観情勢を利用し又は他の運動に便乗して策動を持続しつつある実情にして表面好転化せりと謂うも尚即ち嘗て満州事変の勃発に依り当時彼等は我が国力強大なるを直視し帝国新奇の念乃至威服の念を抱くに至り、その対日感情は著しく好転せることが認められた。「更に支那事変の勃発に再び帝国の強大なる国力を感得し一般朝鮮人は思想上重大なる影響を受け之により皇民たる自覚を一層強めたるものの如く一応其の動向は好転を示し」しかし学生層、宗教家においては依然として民族的偏見を固執し毫も覚醒せず、支那事変を観望して秘かに帝国の敗戦と朝鮮の独立を希ひている（崔吉城、2004）。

朝鮮人がソ連軍に入っていって日本人を殺そうとする陰謀があるという噂が飛んだ。つまり日本人からソ連側のスパイだと思われたのである。現在サハリンの朝鮮人の間ではソ連の軍隊には中央アジアの朝鮮人が入っていたので日本人がサハリンの朝鮮人と誤解したのではないかという人もいる。

ホルムスク（真岡）において8月20日アノミーのような状況において日本人の中では朝鮮人がソ連に情報を流す、ソ連に近い民族,つまりソ連の味方ではないかと思う人がいた。樺太全土の日本人社会がパニック状態になり、日本人の敵はソ連軍であったが、もっと怖い存在は近くにいる朝鮮人となった。朝鮮人がスパイをしたので負けたと、簡単に結びつけてしまったようである。朝鮮人はそれまでよき隣人であり、一緒に仕事をしてきた仲間であった。しかしごく平凡な民衆が、いつの間にか加害者になってしまう。殺す対象は村を越えていない。幼児、女児、男児、女性、老人などを含むジェノサイドの残酷さ極まるこの心はどこから出たのだろうか。他にも朝鮮人がスパイとされた事件「上敷香虐殺事件」もあった。この事件は、スパイ容疑などで捕らえられた朝鮮人19人中18人が警察署の中で射殺されました。生き残った朝鮮人、日本名を中田さんといいますが、彼は何と警察署の便所の汲み

取り口から糞まみれになって必死に逃げ出したとの噂でした。そこに戦争の狂気をみるのである。この異常行動の裏にはソ連侵攻による社会不安という背景がありました。文順河氏は「朝鮮人のために日本は負けた。お前らはロスケのスパイじゃないのかと、わしら家族の目の前で、主人は憲兵からピストルで射殺されました。命からがらここまで逃げてきました。アイゴー」という。日本人は竹槍、日本刀などで朝鮮人を多く殺した（林えいだい、1992：41）。

一方日本人からは朝鮮人がソ連のスパイだと誤解された。終戦の渦巻きの中で朝鮮人が暴れることは予想されるが日本人が朝鮮人を殺した証言は数多く聞ける。朝鮮人は軍の秘密工事をしたので、ソ連軍にもらされたら困る留置されている人の中から日本人だけを先に釈放して、朝鮮人を19人銃殺した。日本人女性と結婚した朝鮮人も日本人に殺された（林えいだい、『証言・樺太朝鮮人虐殺事件』風媒社、1992：197）。

## 結　論

植民地政府の日本は「内鮮一体」により創氏改名や内鮮結婚、徴兵制などの政策とった。つまり民族を超えて日本帝国を作ろうとした。それによってある程度両民族は近くなったのは事実である。隣り近所に住み日常生活の上で多少協力した。しかし基本的に日本人は朝鮮人を信じなかったこと、敵対していることからスパイと思い込んで起きた事件である。これは日本植民地が35年間続き、特に「内鮮一体」の政策を強く実施してきたがその結果を日本人自身が信じていなかったことを明白に示す。つまり民族を超えて完全に溶け合うことは出来なかった。戦争時無政府状況においてはその近さが怖いものになった。そのような時には知っている人が敵の味方になるという怖さを増幅した。つまりスパイという恐ろしい存在になりうることを感じた。それは普段互いに信じていなかったということであろう。この事件は村の内部での残虐行為であった。村を基準として考えれば大規模な殺人犯罪に過ぎないかもしれない。ただ戦争中の敗戦時に朝鮮民族へのジェノサイドであることにいくつかの問題がある。

第一にロシア書記長は３つの理由を挙げている。一つは朝鮮人が暴動を起こすのではないかという不安、次に朝鮮人がソ連軍を先導してきているというデマ、最後にソ連軍が来たときに、日本人の都合の悪い面を教えるといったものだといい、「戦争というものが、あのような異常な雰囲気を作った」と（林：257）いった。つまり戦争が人間性と価値観を踏みじり野蛮性を作

り出す狂気になったものといえる。しかしすべての人が狂気になるわけではない。その状況において少なくとも民族や国家を超えて人間であることの人間性の教育が必要と思う。たとえばアメリカの戦争映画によく登場するヒューマニストのような人はこの事件では見つけることが出来ない。これは戦前の日本人の国民教育が如何に徹底していたかを意味する。

第二には国民国家や帝国の虚像を見ることが出来る。現在も大国主義の国民国家を理想とする国家が多い。しかしユーゴスラビア崩壊から見られるように国家の危機において強大な国家権力は力を失うものになるだろうと考えられる。帝国主義に反して中江兆民が小国主義を主張したように国家のサイズより質の高い民生に主力注ぐべきかも知れない。

第三にスパイといわれた少数民族が国際化時代には二重文化人ともいわれる。ある状況によって英雄になり、裏切り者になるのではなく、つまり状況によるものではなく、自分が作ることによって自己成長していく社会を作らなければならないと考える。

この事件は戦争中、交戦の最中に村の中で起こったものであり、すでに過ぎたものであるが私はいつ、どこででも起きそうなものとして考えている。当時の日本人は村が小宇宙であり、他人を認めない考え方の象徴的な反映である。他人を敵とする、少なくとも戦前の日本人の日常的な生活に因んだものであろう。朝鮮人がスパイとして恐れられているとはいっても実際そのような怖い存在ではないことはよく知っているはずである。朝鮮人は武装する能力もなく、抵抗も出来ない人、女性、子供、幼児さえ殺したのは朝鮮民族を全面的に否定し種をなくす、いわば抹殺であった。そのような性格は戦前の軍事教育に終っていない。国家とか民族を前提にしたエスノセントリズム教育は戦争引き起こす悲劇的な要因になりやすい（K.F. Otterbein,1973:931）。根本的に教育改正すべきであろう。これは日本に限らずむしろ韓国のような反日民族教育も一層問題を大きくしていると考えている。

## 参考文献

K. Gaponienko 『瑞穂のドラマ』

林えいだい『証言・樺太朝鮮人虐殺事件』風媒社、1992

崔吉城「ロシア・サハリンにおける日本植民地遺産と朝鮮人に関する緊急調査研究」平成14-15年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ－１）研究代表者崔吉城、2004

田中了編『戦争と北方少数民族』草の根出版会、1994
崔吉城編『日本植民地と文化変容』御茶ノ水書房
キン　ピオトル　ゲルノビッチ、バンサンヒョン訳『在蘇韓人移民史』探求堂、1993
鄭東柱著高賛侑訳『カレイスキー』東方出版，1998
崔協・李光奎『多民族国家의 民族問題와 韓人社会』 集文堂、1998
John J. Stephan, *Sakhalin*, Claredon Press/Oxford,1971
Noam Chomsky, *At War With Asia*, Random House, 1969
K.F. Otterbein, The Anthropology of War, *Handbook of Social and Cultural Anthropology*, ed. J.J. Honigmann, Rand McNally College Publishing Company, 1973

## Abstract

The Massacre of Koreans in Mizuho Village, Sakhalin

World famous linguist Noam Chomsky, in his book *Fights with Asia* (1969) , criticized the Vietnam War as "a crime against peace, humanity and social justice" quoting Bertrand Russell's saying that "we do not judge it, and witness it." One might question why Chomsky, although he is not a specialist on war and strategy, wrote such a book. At the same time we must ask if war and peace are problems that should be left military strategists and the armed forces.

During the Korean War, I experienced the fighting around the area of the 38th parallel and its effects. I remember the high degree of fear and pain of war, and also the state of blank anomie we felt. At the moment I witnessed soldiers whose objective was to fight for peace become like animals. Murder, plunder, and sexual violence occur all too easily in situations of anomie. Are such acts an inescapable part of war?

Investigating the "Mizuho Massacre of Koreans" slaughtered by the Japanese rmers in a small farm village on Sakhalin Island during the war, I found it almost unbearable to read the juridical documents of the Soviet Union.

With the defeat of Imperial Japan in the Pacific War in 1945, the Soviet force entered Maoka harbor on August 20. False rumors that Koreans would spy for the Soviet army spread to Mizuho Village, which was located about 40km from Maoka. Yasuo Morishita, the chief of the retired Japanese army group in the area (a group that included no Koreans), jumped to the conclusion that Koreans would indeed betray

Japanese villagers. The massacre was carried out in this context.

The book *A Drama of Mizuho* by K. Gaponienko is particularly precious for me. The author based this work on official documents and interviews with many informants. I wish to express my deep gratitude also to non-fiction writer Mr. Eidai Hayashi, who gave me many Russian documents.